

## 平成の『ゆとり教育』に常に対峙してきた学力研実践

山口 大達 和彦

### 到達度評価で高まる子ども集団

到達度評価は教師の力量を高め、教育総体を改善していくためには欠かすことができない取組みです。では子どもたちにと

### 教育内容の三割カット

一九九一年十五年間勤めた大阪から山口市へ戻りました。ゆとり教育への一里塚となる月一回の土曜が始まり教育内容のさらなる一割カットが進められました。

画一的な教育や詰め込み教育が子どもたちへの「落ちこぼれ」や「荒れやキレ」への原因として少しずつ転換が図られようとしていました。

私が学力研大会に初めて参加したのが一九九五年、阪神淡路大震災そして地下鉄サリン事件の起きた年です。そんな中で「読み・書き・計算」に地道に取り組み基礎学力の大切さを強く主張する実践報告は新鮮でした。

教育現場では二〇〇二年の教育内容の三割

カットを目前に控え、総合的な学習の試行が始まり混乱を深めていました。時間割を組むことの困難さ、円周率は3でいいの？台形の面積の公式はなくなるの？社会からは縄文や弥生の言葉も消え、「狩りと狩猟の時代」「米づくりが始まったころ」に変わるなど、先生たちの不安は高まるばかり。

一方、総合的な学習の研究会となれば全国から参加者が殺到し近くの附属小では、教室の活動の様子も見えず、通路は身動きできないほどの混雑ぶりでした。

### 目からウロコの岸本講演

二〇〇一年の山口市教育研究会に岸本裕史先生を迎えて教育講演会を開催しました。

この教育現場の大きな転換の時にどん話をされるのかと参加の先生方も耳を傾けていました。岸本裕史先生は『確かな学力と日本の教育』と題して二時間を熱く語り続けました。

次年度からの『総合的な学習』の本格実施

を前に『今大切なのは基礎・基本を鍛え確かな学力をつけること』『総合的な学習』を進めると、一層の学力低下を招くばかりか、日本の至るところで学級崩壊が加速し、落ち着きのない子どもたちが拡散していくこと、確かな学力としつかりとした知識を身につけてこそ、「考える力」や「生きる力」につながる学力が身に付くことを強く熱く語られました。このままでいいのだろうかと不安を抱えていた先生方にも『読み・書き・計算』の大切さを訴え、『今の子どもたちは、詰め込みなどされていない』しつかりとした知識を持つことこそ考える力の礎になる』・・・

そのことばの一つ一つが強く先生方の胸に響きました。

### 九年で終わりを迎えた『ゆとり教育』

『総合的な学習』が始まるころには現場はすっかり疲弊し『何を、どのように進めるのか』数年前までの現場のゆとりはすっかり影を潜め、週三時間の準備に忙殺されるようになりました。教科横断的な学習？地域学習を重点に、いや外国語学習で異文化理解をなど、算数や国語の習熟もできないまま資料の収集地域の方々への連絡、講師依頼などこれまで

にない煩雑さと多忙に追われるようになりました。

二〇〇二年一月十七日突然出された遠山大臣の『学びのすすめ』は、さらに混乱に拍車をかけました。『確かな学力向上のための二〇〇二アピール』と題して放課後の補充学習、朝の読書の推進、基礎・基本の定着、習熟度別指導まで挙げられています。

指導方向の二極化となり多忙と混乱は増すばかりでした。

『ゆとり教育』が始まらんとしているとき  
の方向転換とも言えます。このきつかけとなつたのは『分数のできない大学生』で著された進学校を通過してきた学生たちの学力の実態と貧弱さ、保護者の円周率を始めとした学力低下への懸念、教育現場からの悲痛な訴えがありました。

指導要領の大きな転換も挙げられます。これまで上限とされてきた教科の指導内容が最低基準として示され、子どもたちの学力格差が一段と進む契機となりました。

大きな混乱を巻き起こした『ゆとり教育』は二〇一一年をもって終了します。教科内容の二割アップ、教科書の増大など学力向上に

シフトしていきました。

二〇〇七年には全国学力状況調査が復活し各都道府県がその順位を競い、現場への指導が強くなるばかりでした。

### 学校ぐるみの学力づくりを学ぶ

私が学力研大会へ参加し大きな刺激を受けたのは二〇〇二年の久保先生の実践報告でした。

- ・なぜ学校は劇的に変わらないのか。
- ・まずは子どもたちの学力実態の把握を
- ・平均点ではなく、学力分布をみることに。
- ・中間総括を行い、すぐに実施すること。
- ・早速二学期には実態把握のためのテストを行いました。十分だと思われたはずの定着がほとんどなされていないこと。担任の予想をはるかに超える学力分布のバラツキ、実感しました。学力実態の把握は学校全体を動かす大きな契機となりました。

- ・朝の十分間は漢字や計算の習熟に
- ・全校で百マス計算に取り組むこと
- ・学期に一回の実態確認のテストを

学級のみ学年のみの取り組みから学校ぐるみの取り組みへ大きく転嫁した二〇〇二年の秋でした。総合的な学習にも取り組みながら

まずは基礎・基本の定着を目指しました。毎年のように職場の仲間と学力研大会へ参加し多くのことを学び職場へ広めることに努めてきました。

### 一斉授業の大切さや授業規律を学ぶ

全国の学校が『ゆとり教育』に翻弄される中、勤務校ではいつも『学校ぐるみの取り組み』そして『授業改善』に取り組んでいきました。赴任校はいつも「立ち歩きや私語の絶えない」中からの出発でした。そのスタートは『のびのびタイム』等の習熟の時間の確保、授業規律の確認と改善、ノート指導、聞くこと・話すことを大切にす授業でした。

久保先生の『一斉授業の復権』『学力づくりで学校を変える・子どもを変える』には大きな刺激を受け学校全体の指導の指針としてきました。

平成の教育を振り返った時、その流れに抗うように学力研の実践から学び続けました。今また大きく学力の向上、「主体的・対話的で深い学び」が提起されています。

子どもたちの願いに応えるべき今日の実践とは何か、地道に着実にを積み上げ模索していききたいと思います。